

特別支援学校在籍児童生徒の余暇指導に関する研究

風間 健一

I 問題

障害児の余暇の充実の重要性が述べられるようになってきたのは、1992年の隔週学校5日制が導入された頃からである。障害児の余暇について、武蔵・高畑・平野・安達（1997）が行った調査では、「障害のある子どもの日常を見ると家族が働きかけなければ外に出ることもなく、また近隣の子供と遊びが合わないために外にでも一人であることが多く、暇を持て余している」ことが指摘され、最近の調査（武田・我妻，2007）でも同様の報告がなされている。障害のある児童生徒の休日の余暇活動についての調査・研究は多いが、その結果を見ると現状はあまり大きく変わっていないといえる。

一方で学校教育の現場では余暇指導について取り組みがなされ始めている。北海道教育大学教育学部附属養護学校（1999）では教育課程を「くらす」「はたらく」そして「余暇」という3つに分類し、指導を行っている。余暇指導における活動として、「快を味わえる活動」をあげ、「自分の好きなことを生かした活動」ができるように指導を行っている。

このように特別支援学校において余暇を楽しむための指導が日々の授業場面に反映されている報告はあるが、余暇に関する指導体制や指導場面を含めて明らかにした報告は少ないのが現状である。

そこで、特別支援学校在籍児童生徒の余暇に関する指導を調査し、児童生徒の余暇指導の在り方について検討することは意義のあることと考える。

II 目的

本研究では特別支援学校で、先進的に余暇指導に取り組んでいる事が確認された学校を対象に以下の点を明らかにし、在籍児童生徒が現在、

あるいは将来充実した余暇を送るための指導の在り方について検討する。

- 1 在籍児童生徒の余暇指導に対する学校の方針と指導体制
- 2 個別の教育支援計画への余暇指導の位置づけと関係機関等との連携
- 3 個別の指導計画への余暇指導の位置づけと授業等における具体的な実践内容

III 方法

1 研究 I

1) 予備調査

(1) 目的

対象校の研究紀要等から抽出する余暇指導に関する内容項目について検討する。

(2) 方法

① 対象

特別支援学校進路指導担当指導教諭3名

② 調査方法

インタビュー調査

③ 結果および考察

調査の結果から以下の項目について抽出することとした。

- ・ 学校における余暇指導の方針
- ・ 校内における余暇指導体制（分掌等）
- ・ 個別の教育支援計画作成及び余暇指導の位置付けと余暇を行う関連機関との連携等

2) 本調査

(1) 目的

在籍児童生徒の余暇指導に対する学校の方針と、指導体制及び個別の教育支援計画への余暇指導の位置づけと関連機関との連携を明らかにする。

(2) 方法

① 対象

対象校として独立行政法人国立特別支援教育総合研究所の特別支援教育実践研究課題のデータベース、文献等によって先進的に余暇指導に取り組んでいることが確認された特別支援学校9校（A校～I校）を対象に調査を実施にした。

② 調査方法

校内で編集された研究紀要、それに類する資料を郵送、または対象校の研究協議会参加により収集し、上記項目について抽出の上、整理をした。

(3) 結果および考察

① 余暇に関する学校の指導方針及び指導体制

余暇について学校目標などで直接的な表現をしているところはなかった。しかし、I校では教育目標を実現する力として「自立につながる力」をあげ、それを育成する視点から「生活を楽しむ余暇に関わる力」という観点を設け、各学部で具体的な指導方針を立てていた。また、E校のように学校目標を「生きる力」として4つの力で構成し、その中のひとつ「生きて生活する力」の中に、余暇についての指導を位置づけられている学校があった。他の学校でも、学校の指導方針として、「自立」「生きる力」などを掲げており、それらの中に「余暇」に関する指導を位置づけている学校があった。E校、G校では学校研究目標、F校では高等部研究目標で「余暇に関する指導」を重点目標として位置づけて、研究を行っていた。学校教育の中で研究課題として余暇指導を重要視している事が予想された。

指導体制として、F校では校務分掌上に「余暇」（本年度より「遊び」と名称を変更）の分掌を作り、遊びの指導、図工、音楽や学校祭などを担当し、余暇指導を行えるよう体制を作っていた。この他、学校研究の中心的役割を担う研究部の中に「余暇班」を位置づけ、ここで余暇の指導を研究・実施する学校があったが、多くの学校では分掌を持たず、指導を行っていた。

② 個別の教育支援計画への余暇指導の位置づけと指導

E校をはじめ「個別の教育支援計画」の中に「くらす」「働く」そして「趣味・余暇」の目標を設定するなど、「個別の教育支援計画」に位置づけている学校があった。また、余暇指導の目標を設定するために、すべての学校で、児童生徒の余暇の過ごし方に関する実態を「個別の教育支援計画」策定時、改訂時調査等により把握していた。特に余暇に関する実態把握のツールとして、「生活地図」の活用が多くなされており、児童生徒の活動範囲や地域資源の活用など多岐にわたる情報が入手できるようになっていた。児童の余暇を含めた生活全般の現状を知るための有効なツールであると考えられる。

実態把握から具体的に指導に反映させる際に、大学附属校であるF校では、余暇の実態を「個別の教育支援計画」の「遊び」の項目に反映させ、児童生徒一人一人に教育課程を編成し「個別の指導計画」を通して具体的に指導を行っていた。公立校では一人一人に教育課程を作成することは難しいが、F校が作成した指導内容の一覧などを活用することで余暇を含めた指導に対して計画的・組織的に指導ができると考える。

計画に基づいた余暇指導は、各校様々な時間で行われていた。その中でも、例えばB校は「生活単元学習」の中で「公共機関の利用」「お出かけ、買い物学習」などを、D校では「レンタルショップの利用」など地域に出て、余暇に結びつく買い物学習など、生活により密着した、また必要な経験を行う学習を行っていた。またC校では、「日常生活の指導」の中でスポーツ活動など1日の日課になる趣味などの時間として余暇の指導を実際に行う例もあった。教科・領域を合わせた指導、総合的な学習の時間の中で多く行われており、指導の機会が多岐にわたっている様子がうかがえた。

全体として、小学部は「遊びの指導」などの中で集団の遊びを体験すること、参加すること

の授業内容が多く、中学部、高等部では「総合的な学習の時間」では、例えばレクリエーション活動でのゲームの出店希望の選択肢を用意し、活動するなど、の選択肢のある授業が行われていた。

障害のある児童生徒は、余暇活動の機会が必ずしも多いとは言えない。そのためどのように余暇を過ごせばいいかわからない事がある。学校教育の中で余暇活動を体験する機会を作り、自らが活動を選択する体験が必要と考えられる。

③ 関連機関との連携

各学校とも地域性が様々であり、連携できる関連機関も多岐にわたっていた。D校のように、地域の特性を生かし、地域の実業団のサッカーチームなどから授業に参加してもらうケースやE校のように大学が近隣に多いという利点から学生ボランティアを育成している学校、C校のように自校の地域で余暇に使える場所や人を地域をリソースとしてリストアップし、それを、ファイリングして、余暇指導に役立てている学校もあった。なお、ファイリングした情報は保護者への情報提供にも活用している。C校のように地域に関して利用できる資源のチェックを行い、その資源を活用することで地域で余暇を過ごすことが促進されていくとともに地域の障害のある子ども達への理解が深まるものと考えられる。

2 研究Ⅱ

1) 目的

個別の指導計画への余暇指導の位置づけと具体的な実践内容について明らかにする。

2) 方法

(1) 対象校（及び方法）

研究1の調査から情報量の多かったB特別支援学校

(2) 調査方法

B校の研究主任にインタビュー調査を実施した。

3) 結果および考察

(1) 個別の指導計画への余暇の位置づけ

B校では、児童生徒の実態把握の中から余暇

の充実の目標があがってきたときに「本人にとっての意味」「周りに者にとっての意味」で「必要性」「実効性」「好み」「ライフスタイル」の観点からどのような意味があるか考え、個別の教育支援計画で3年間の目標を決め、個別の指導計画でさらに短期的で具体的な目標である「教育での1年間の指導」を立てて指導に当たっている。さらに、個別の指導計画と関連させて、学校で培った力を家庭や地域の中でも生かすことができるように段階を踏んだ「移行のための支援計画」作り、余暇を含めて指導に当たっていた。

(2) 具体的な実践内容

B校では小学部の余暇を含めた指導例として、遊びの指導、自立活動、日常生活の指導があげられた。その他、合わせた指導である生活単元学習に位置づけることも多かった。中学部などでは、生活単元学習の中で「お出かけしよう、公共施設の利用、買い物」「友達と一緒に余暇施設に行こう」が設定されており、高等部では「働くこと、暮らすこと、遊ぶこと」の中で、空いた時間を豊かに過ごすための余暇の指導を行っていた。

VI まとめ

先進校でも余暇指導に関する学校目標を立てたり、分掌を設けたりしているところはほとんどなかった。それでも余暇に関する児童生徒の実態を把握し、「個別の教育支援計画」や「個別の指導計画」に余暇の指導目標等を位置づけて指導が行われていた。教師自身も様々なことに興味・関心を持ち、情報提供し、児童生徒の余暇の選択肢を提示できるようにする事も大切であると考えられる。

文献

- 北海道教育大学教育学部附属養護学校（1999）研究紀要22集。
 武蔵博文・我妻則明（2006）学校5日制における知的障害児の余暇生活に関する調査研究—盛岡市とその近隣地域の実態調査—、岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要、5、163-182
 武蔵博文・高畑庄蔵・平野道子・安達勇作（1996）知的障害児の家庭生活に関する基礎研究。富山大学教育学部紀要A（文化系）、49、43-5